

【釈文】

文のやうひろうして候、としくの御うりまいり候、めでたくおほしめし候て、御しやうくわ^{返シ書}ん候はんするよし、よくく申とて候、いく久しくもまいり候はんすると、かへすくめてたく候、かしく、

【漢字仮名交じり文・現代仮名づかいに直すと】

文のよう披露して候。年々の御瓜まいり候。めでたく思し召し候て、御賞翫候わんずる由、よくよく申せとて候。幾久しくもまいり候わんずると、返す返すめでたく候。かしく。

【現代語訳すると】

手紙の内容を披露いたしました。毎年の御瓜が到来しました。喜ばしくお思いになられ、ご賞味になられるであろうことを、くれぐれもよろしく伝えよとのことです。いつまでも長く到来するに違はなく、ほんとうに喜ばしいことです。かしく。

【解説】

『実隆公記』明応四年（一四九五）六月二十三日条から二十六日条を記した一紙の裏面に残された文書である。同月二十三日条に「佳例瓜折令進上禁裏并^{（後土御門天皇）}室町殿・小川殿等、同遣高倉局了^{（日野富子）}（足利義高ノ子義澄）

（佳例の瓜の折を禁裏ならびに室町殿・小川殿等に進上せしむ。同じく高倉局に遣わし了んぬ）」と見えている。すなわち、実隆は、家領の美豆牧（山城久世郡）から納められた瓜を例年のように、禁裏・室町殿そして日野富子に献上し、あわせて富子の申次にあたる女房高倉局にも贈ったわけである。折とは折箱に詰めたことを示している。この女房奉書は、禁裏からおそらく同日中に送られてきた札状であろう。すぐに翻して日記の料紙に用いられたため、日記と紙背文書とのあいだで時間差がまったく存在していない。第二紙目を欠いているが、内容的には一紙で完結しているので、第二紙目には、一番奥に「侍従大納言とのへ」という切封上書が記されるのみだったと考えられる。